高徳寺だより

令和７年 11 月 16 日　153 号
曹　洞　宗　　高 徳 寺
TEL　0238-42-2859

光陰（こういん）は矢よりも迅（すみや）かなり、身命（しんめい）は露よりも脆（もろ）し

例年開催の夏休み「こども禅のつどい」

今年も残り少なくなり、一年を総括する時期になりました。思えば長い夏の猛暑も今となっては、遠い出来事となり、短い秋はあっという間に過ぎて早、冬支度となりました。さて、表題の言葉はご法事でみなさんと一緒に読経いただく曹洞宗の経典「修証義」の一節です。ですから、どこかで目にしたものと思った方も多いはずです。つまり「時間の経過や四季の移ろいは矢よりも早く、露草よりもはかないものである」と示されていますが、昨今、身近な人との別れに臨んだ時にいつもこの言葉が深く身に染むようになりました。

歌う尼さんの法話とコンサート「合掌祭」

実は今年の早春、高校時代の友人が亡くなりました。家族の意向もあり、親しい友人と共に葬儀に臨むことも生前の遺徳に直接触れることも叶いませんでした。昨今の葬儀事情の大きな変化には、無念、無力さを感じることが多くなりました。しかしながら、どんな時代になろうとも命の尊厳を讃え亡き人の思いを自分の思いとし、慈しみの心で生きる事を忘れてはなりません。自分自身の時間は有限であり、はかない命だからこそ人は精一杯生きるのです。

そうは申しましても、この複雑な現代社会を日々全力で生きるのはそう簡単なことではありません。人と人との関わり合いの中から、どうか生きる力を養っていただきたいと、お寺からも何かと情報など発信して参りたいと思いますので、皆さんからもお声掛け頂ければ幸せです。また、少しでも地域や未来を担う子供たちのためにも力を注いでまいりたいと存じます。さて、思えば今年は大塚地区外の多くの皆さんにも様々な行事に参加いただきました。また、地元のテレビでも特集を組んで頂き大きな反響がありました。今後も多くの皆さまにお寺に足を運んでいただく機会を作ってまいりたいと思います。

初めてのお盆行事「怪談の夕べ」

長男・風雅和尚の研究センター通信

ご無沙汰しています。 東京都内では10月になっても暑い日が続きました。月が変わり、ふと吹く冷たい風に、いつの間にやら秋も終わりなのだなと感じる季節になりました。このままあっという間に年越しになるのでは、なにかやり残したことはないかと毎年のように焦りつつも「ああ、今年もここまで来たのだな」としみじみしています。

さて、私が所属している曹洞宗総合研究センターでは、昨年に引き続き「おぼうさんげき」を上演しました。関東の幼稚園や保育園を訪ね、園児たちに仏教を伝える活動です。今年は群馬県のこども園に伺いました。テーマは「いただきます」でした。

皆さまは食事の前に、どんな心持ちで「いただきます」と手を合わせていますか？「命をいただく感謝」と答える方が多いと思いますが、曹洞宗の教えでは、それだけにとどまりません。

私たちがいただいているご飯は、牛や豚、野菜やお米など、全て尊い命ですね。その命を育てる人、収穫をする人、運ぶ人がいて、私たちがスーパーでお買い物ができるのです。そして愛情を込めてお料理をする人のおかげでやっと口へ運ぶことができるわけです。もっといえば、牛や豚の餌や、農機具を作る人、スーパーの店員さん、美味しく食べてくれる家族、雨や風、太陽の光といった自然の恵みまで、実に多くの支えがあります。

この「たくさんの存在に支えられて、私たちはご飯をいただくことができる」ということに気づき、感謝を込めて手を合わせるのが「いただきます」なのです。

これは「五観の偈」の１つめにあたります。「一つには、功の多少を計り、彼の来処を計る」。高徳寺の坐禅会でも、皆さんとお唱えしていますので、ご存知の方もいらっしゃるかと思います。とても大切なお唱えごとです。

群馬の園で劇を終えたあと、園児のみんなと一緒にお昼ご飯をいただきました。元気な声で響いた「いただきます！」を聞き、きっと子どもたちに届いたのだな、布教とはありがたいものだなと改めて感じました。

私たちは毎日食事をします。それゆえに、感謝をうっかり忘れてしまうこともあります。だからこそ、ときどき立ち止まって、食材の命の尊さ、かけられた多くの手間と苦労に思いを巡らせることが、心のゆとりに繋がるのだと思います。

年末が近づき、気持ちばかりがせわしくなりますが、まずは１つひとつ、心にゆとりをもって準備を整えていきたいと思います。今年も１年、皆さまとともに無事に過ごせたことへの感謝を込めて行じてまいります。

高徳寺ホームページ　koutokujisotozen.com
最新情報はこちらからごらん下さい→→→